

副詞的とされる遊離数量詞の 文法的な特性について

石田 尊

キーワード：遊離数量詞、分配的解釈、VP quantifier、副詞節、主題コントロール

要 旨

日本語の遊離数量詞には、分配的解釈を持ち、主名詞と構成素関係のような関係を構成しないものがある。これらは副詞的な遊離数量詞として見なされているが、本稿ではその解釈が、主名詞の θ 役割に合致する実体を数え上げるものであること、また副詞的な遊離数量詞は文内に比較的自由に分布するが、その出現は主名詞の θ 役割が必須度の高いものである場合に限られることを確認する。これらの観察結果について本稿では、副詞的な遊離数量詞は内部に空範疇の主語を備えた副詞節中の述部として現れ、かつこの空範疇は主節の動詞の θ 役割をコントローラとする主題コントロールの PRO であるとする分析を提案し、副詞的とされる遊離数量詞の振る舞いを統一的に説明する。

0. はじめに

本稿の目的は、「3人」や「5冊」のような形式を取る遊離数量詞のうち、特に動詞句(VP)の量化に関わる副詞的な数量詞とされるものの文法的な特性について検討を行うことである。日本語の遊離数量詞に対しては様々な分析が提示されているが、本稿では Ishii (1999) および 川添 (1999) における二分法と、特に 川添 (1999) による意味論的な記述とを議論の基盤に置いた上で考察を進める。

* 本稿の準備中に、第9回現代日本語文法研究会（2012年11月17日、於大東文化大学）にて口頭発表を行うことができた。発表の際に有益なコメントをいただいた、阿部二郎、井本亮、田川拓海、富樫純一、福島健伸の各氏にお礼申し上げる。なお当然のことながら、本稿の誤りはすべて筆者に帰するものである。

以下ではまず、遊離数量詞の分配的解釈について検討を行い、その量化は主名詞に認可される θ 役割に合致する実体を数え上げるものであることを示す。また、主名詞 (host NP) と local な関係を構成する名詞句の遊離数量詞 (Ishii (1999) の "NP quantifier" に該当するもの) と異なり、副詞的とされる遊離数量詞は確かに副詞類や随意的な二次述部のような自由な出現位置を示すこと、ただしその出現は、動詞を下位範疇化する、必須度の高い θ 役割の名詞句を主名詞とする場合に限られること等を観察する。以上の考察をもとに本稿では、日本語の副詞的な遊離数量詞は内部に PRO のような空範疇を備えた副詞節中の述部であり、かつこの PRO は主題コントロール (Jaeggli 1989) に従うと考えられることを指摘する。

1. 遊離数量詞の解釈と意味論的な特徴

日本語の遊離数量詞については、主名詞またはその移動の痕跡と数量詞とが相互 c-統御関係のような local な関係を構成していると考えられる場合と、動詞句を修飾する副詞的な要素として考えられる場合とが存在する。Ishii (1999) では、前者を "NP quantifier"、後者を "VP quantifier" と呼び、「3 人」「5 冊」のような「数詞＋類別詞」の遊離数量詞については、どちらのタイプも存在するとした。

川添 (1999) では、やはり遊離数量詞を二つに分類し、主名詞と構成素関係を構成する遊離数量詞を「後置存在量化詞」、そうではない遊離数量詞を「副詞的量化詞」と呼んで区別している。本稿では前者を暫定的に「名詞句の遊離数量詞」、後者を「副詞的な遊離数量詞」と呼んでいくことにする。

Ishii (1999) と川添 (1999) の議論は、基本的な発想は共通していると思われるものの、各分類が持つ解釈については分析上の異なりがある。Ishii (1999) では、名詞句の遊離数量詞では非分配的な単一事象解釈の他に、文脈により分配的な多回事象解釈が得られる場合があること、および主名詞がスクランプリングを受けた場合に部分量解釈が得られることが指摘されており、副詞的な遊離数量詞については、分配的な、多回事象解釈のみに限定されると指摘されている。一方川添 (1999) では、名詞句の遊離数量詞には非分配的な非部分量解釈のみが認められ、部分量解釈は、分配的解釈と共に副詞的な遊離数量詞の方に認められている。したがって、部分量解釈が名詞句の遊離数量詞の解釈であるのか否かについては対立する分析が示され、

かつ多回事象解釈のように分配的な解釈についても、分析上一致しない点があるということになる。両分類の統語的な異なりについては、どちらも主名詞と遊離数量詞とが local な関係を構成するか否かという観点と連動した区分であるため、Ishii (1999) と川添 (1999) の異なりは、大まかには遊離数量詞の分類とその解釈との対応に関する認定の異なりとして捉えることができる。

本稿では、構造と解釈との対応関係についてより簡潔な形で提案しているということから、川添 (1999) の分析に対する検討を議論の出発点として検討を開始する。

1.1. 遊離数量詞の分配的解釈について

- (1) $\exists 3x$ (学生(x)) [x が来た]

「学生であるような x のうち 3 人が来た」

(川添 1999: p.10, (31) および p.18)

(1) に示したのは、川添 (1999) が示す「副詞的量化詞」の現れる文「学生が 3 人来た」(部分量解釈) の意味表示と、川添自身によるインフォーマルな解釈である。川添 (1999) によれば、"(学生(x))" は限定節であり、量化の範囲を設定する。また [x が来た] という、"x" を含む文(命題) 全体が量化詞の scope に入っている。したがって、何人かの学生集団があり、そのうちのある「3 人」について、[x が来た] が成立するというような意味表示であると解釈できる。

川添 (1999) は、副詞的な遊離数量詞の解釈の特徴として、以下のような例での束縛変項照応が可能であることを指摘している。(2) の「そいつ」は遊離数量詞「3 人」のスコープ内にあるとされており、そのため「そいつの作った歌」は「3 人がそれぞれ自分で作った歌」の解釈となる。

- (2) (全部で 30 人いる) 3 年 5 組の生徒が 3 人そいつの作った歌を歌った。

(川添 1999: p.17, (61)。原文の下線を削除)

さて、川添 (1999) では、束縛変項照応が可能な場合の解釈と、Ishii (1999) で副詞的な遊離数量詞に認められている分配的な多回事象解釈（累積的解釈）との共通性

が認められている^{*1}。ここでは、(1)の意味表示に関して、川添(1999)の議論を若干拡張しておきたい。

(3) A: この新刊雑誌、売れてますか？

B: ええ、今朝も学生さんがそれを5人買って行きましたよ。

(高見 1998: (上) p.91, (17))

(3)は、相互 c-統御条件に従わない遊離数量詞の例として高見(1998)で示されているものである。この例は確かに許容度が比較的高く、また Ishii(1999)の指摘するように、分配的な多回事象解釈のみが得られる。類例を追加しておく。

(4) a. ? 昨日までに、近所の中学生がポチの写真を3人届けてくれた

b. ? 先月うちの店では、若い女性が超大盛りカレーを6人完食した

筆者の内省では、主に語順に起因する許容度上の問題が生じるものの、(4)の2例は(3)Bの遊離数量詞と同じ多回事象解釈が現れる。またこの例は、(5)でも確認されるように束縛変項照応が可能である。特に遊離数量詞とソ形指示詞との表層上の語順の問題に由来する許容度の低下を回避するため、(5)aでは遊離数量詞の語順は変更する。

(5) a. ? 昨日までに近所の中学生が3人、そいつの撮ったポチの写真を届けてくれた

b. ? 先月うちの店では、若い女性が超大盛りカレーを6人、そいつの彼氏の見ている前で完食した

(1)の意味表示は、川添(1999)において直接的には副詞的数量詞の部分量解釈を示すものであるが、多回事象解釈にも基本的には適用可能なものであると考えられる。たとえば(5)aでは、「中学生であるような"x"のうち、ある3人がポチの写真を届けてくれた」が成立していること、(5)bでは、「若い女性であるような"x"のう

*1 詳細は川添(1999: pp.20-23)を参照されたい。なおすでに触れたが、部分量解釈の扱いについては Ishii (1999)の分析と川添(1999)の分析は一致していない。

ち、ある 6 人が超大盛りカレーを完食した」が成立していることを、(1) のような意味表示で示すことができると考える。つまり、(1) の形式の意味表示自体には、部分量解釈も多回事象解釈も指定されておらず、この種の遊離数量詞が持つ分配的解釈の基本的な構造が示されているのみとし、その遊離数量詞の具体的な解釈が部分量解釈となるか、それとも多回事象解釈となるかは文脈によって決定されると考えるというのが本稿の発想である。

この発想では、部分量解釈と多回事象解釈の生じる条件は、大まかに言えば次のようになる。文脈により限定節が示す要素の集合が明示されている場合には、数量詞が示す数量の「分母」が明示されていることになる。(2) で引用した川添(1999: p.17, (61)) の例でも、「(全部で 30 人いる)」のように、遊離数量詞が示す「3 人」という数量の分母を(括弧付きながら)明示している。こうした文脈的状况で話者が強く読み取る解釈が、部分量解釈である。一方、(3) (4) で見られる多回事象解釈では、遊離数量詞が示す数量の分母、つまり当該の発話において意識される集合中の要素の総数は漠然としたままで、明示されていない。こうした文脈で、かつアスペクト的な条件^{*2}についても多回事象解釈と矛盾しない場合に話者が強く読み取る解釈が、多回事象解釈である。(1) の意味表示を、こうした発想で捉え直し拡張しておくことで、どちらも分配的解釈であると考えられる部分量解釈と多回事象解釈の共通性と異なりを把握できると本稿では考える。この認定の利点の一つは、部分量解釈と多回事象解釈が同時に認められる以下(6) のような例についても問題なく扱えることである。

- (6) a. この夏休み、うちのクラスでは、女の子が海外に 6 人行った
- b. 全部で 12 人いるうちの会社の研究員は、これまでに特許を 8 人取得した

以上の議論からすると、部分量解釈か多回事象解釈かという点は副詞的な遊離数量詞にとって本質的な違いではないことになる。また、[x が来た] の"x"に当てはまるということはつまり、"x"の命題内での役割、つまり述部「来た」が"x"に認可する θ 役割に合致する実体であるということを表すと考えられる。このとき文脈等により、限定節で指定される実体全体の集合と、 θ 役割が認められる実体として

^{*2} 遊離数量詞とアスペクト的な条件との関わりについては、北原(1996, 1997)、三原(1999)を参照されたい。また本稿 1.3 節でも関連する話題を取り上げる。

そこから数え上げられる実体の集合の包含関係が前景化すれば部分量解釈となり、 θ 役割が認められる実体の数え上げ自体が前景化し、そこから当該事象の生起回数が推論されるような文脈が整えば、累積的解釈や達成量の解釈として読み取られる多回事象解釈となる。いずれの場合においても、当該の命題内において主名詞に認可される θ 役割に合致する実体の数を数え上げているという点が重要であり、この量化の仕方が分配量解釈の基本にあると、本稿では考える。

以上の検討から、副詞的な遊離数量詞は、述語が遊離数量詞の主名詞に認可する θ 役割に合致する実体を数え上げる、「 θ 役割付き実体の量化」を表す数量詞であると本稿では考える。この点は、次の箇所で見える名詞句の遊離数量詞との大きな異なりとなる。

1.2. 名詞句の遊離数量詞の非分配的解釈について

本稿は副詞的な遊離数量詞を考察の対象とするものだが、比較のため名詞句の遊離数量詞についても確認を行っておく。川添(1999)の「後置存在量化詞」は、主名詞と遊離数量詞とが構成素関係を構成するとされており、かつ束縛変項照応が不可能であることが指摘されている。また、Ishii(1999)では名詞句の遊離数量詞のみに認められる解釈として、単一事象内での非分配的な解釈(non-distributive reading)が指摘されている。その具体的な解釈については石田(2012)においても検討を行ったが、ここでは特に川添(1999)で名詞句の遊離数量詞に与えられている以下(7)の意味表示について検討を行いたい。

- (7) ヨッ x[学生(x)] & X が来た
 「学生が3人いて、そいつらが来た」 (川添 1999: p.9, (30))

(7)の意味表示では、「限定節を持たず、名詞句は核スコープ(nuclear scope)に入るので、「学生が3人いて、そいつらが来た」という意味になる(川添 1999: p.18)」とされている。解釈上の特徴としては、副詞的量化詞に対する(1)と異なり、後置存在量化詞では束縛変項照応の解釈が不可能であり、かつ文内での「E タイプ照応」が可能である。

- (8) a. 学生が3人 そいつらの作った歌を歌った。
 b. ヨッ x[学生(x)] & X が X の作った歌を歌った

- c. 「学生が3人いて、そいつらがそいつらの作った歌を歌った」

(川添 1999: p.15, (38) (49))

E タイプ照応は、束縛変項照応の場合と同様に量化詞を先行詞とするが、照応表現自体は量化詞のスコープ外にある場合であるとされ、量化詞を含む節を真にする個物が複数であるような場合には、「そいつら」のように「複数形」のかたちとならなければならないとされている。(8)と(2)を比較すると、確かに単一事象解釈(「3人組の学生が3人で作った歌を一緒に歌った」と同様の、グループ読みの解釈)の場合には「そいつら」の形式である必要があることが確認できる。

すでに副詞的な遊離数量詞については部分量解釈に限定しないものとして拡張を行ったが、その際に本稿が重視したのは、 θ 役割と量化との関与である。同じ観点から(7)や(8)を検討すると、名詞句の遊離数量詞における量化には、述語が主名詞に認可する θ 役割に合致する実体を数え上げるというような特徴が見られず、むしろ(若干比喩的な言い回しとなるが)主名詞に対する量化が成立した後で述語との θ 役割上の関係が構成されているように(つまり量化自体に θ 役割との直接の関わりはないように)見える。

川添(1999)の意味表示自体の検討については議論を保留するが、副詞的な遊離数量詞と名詞句の遊離数量詞の解釈の基本的な異なりとして、 θ 役割と量化との関与に関する差異があることを本稿では重視し、以下(9)のように整理する。

(9) 数量詞の解釈と量化のタイプ

- a. 副詞的な遊離数量詞とされる分配的解釈の遊離数量詞は、主名詞に認可される θ 役割に合致する実体を数え上げる「 θ 役割付き実体の量化」を表す数量詞であり、具体的な解釈としては部分量解釈や多回事象解釈が得られる。
- b. 非分配的解釈が現れる名詞句の遊離数量詞は、主名詞に認可される θ 役割とは関わりなく、主名詞の実体の数量を示す数量詞であり、具体的な解釈としては非部分量の単一事象解釈が得られる。

なお暫定的な呼称となるが、以下では(9)a のような量化を「 θ 実体量化」、(9)b

のような量化を「単純実体量化」と呼ぶことにする^{*3}。

1.3. 量化のタイプと解釈の対応

(9)a で示した θ 実体量化の遊離数量詞の観察作業に入る前に、多回事象解釈と θ 実体量化との関係、および数量詞内の類別詞と遊離数量詞の機能との関わりの2点について簡潔に確認を行っておく。この箇所ではまず、 θ 実体量化の遊離数量詞の解釈について確認する。

- (10)a. 昨日健太は会社の車を4台洗車した
- b. 昨日一日で、涼子はハンバーグを240枚焼いた

(10)a、b の「4台」「240枚」は、それぞれ「昨日健太が会社の車を洗車した台数」「涼子が昨日一日で焼いたハンバーグの枚数」を示している。これらはどちらも同時量のような単一事象解釈ではなく、多回事象解釈(累積読み)が最も自然な解釈である。(10)a は川添(1999)の言い換えの様式に従えば、「会社の車であるような x のうち4台を健太が洗車した」となるが、すでに1.1節で述べたように、文脈上量化の際の分母が明示されない場合であり、この場合「(昨日という時間帯において)健太という人物が洗車した会社の車であるような x は計4台」というような解釈が現れる。これは、総数については漠然とした「(健太の)会社の車」((10)b では「ハンバーグ(というもの)）」という集合から対象の θ 役割に合致する実体(「昨日健太が洗車した」対象や「涼子が焼いた」対象)を数え上げてみた場合の数量であり、いわゆる達成量の解釈である。

- (11)a. 昨日男の子がこの堀を5人乗り越えた
- b. 昨日一日で、女の子がこのゲームを8人クリアした

(11)では、それぞれの遊離数量詞について、「乗り越える」「クリアする」の行為

*3 本稿の発想では、単純実体量化で得られる数量は $\{x_1, x_2, x_3, \dots\}$ のようにある存在 x の数を直接数えたもの、 θ 実体量化は $\{\text{行為者1, 行為者2, 行為者3, } \dots\}$ のようにある θ 役割に合致する実体を数えたものということになる。二つの量化に関する形式的な整理については、川添(1999)の意味表示についての検討と合わせ今後の課題とし、本稿では(9)のような素朴な記述に留める。

者として認められる実体を、「昨日」「昨日一日で」という指定された時間帯について数え上げてみるとそれぞれ「5人」「8人」であった、という解釈(行為の主体の数量を示す解釈)であると認めて特に問題はない。したがって、 θ 実体量化と本稿が呼ぶ量化を副詞的な遊離数量詞が示すと考えることで、(10)(11)の解釈は自然に予測できるということになる。このことは、北原(1996, 1997)で示された項構造と遊離数量詞の解釈の対応関係についても、副詞的な遊離数量詞が示す θ 実体量化という概念により問題なく導入できることを意味する^{*4}。

以上から、(9)a の一般化に多回事象解釈の場合を含めて問題はないことが確認できたと考える。

1.4. 類別詞の示すカテゴリと遊離数量詞の機能の問題

本節最後の課題として、遊離数量詞内の類別詞と遊離数量詞の機能との関わりについて検討しておく。副詞的な遊離数量詞は、Ishii(1999)・川添(1999)ともに副詞的な要素とされている。その観点は、「主名詞」と遊離数量詞との関係は動詞句の修飾を経由した間接的なものと見なすことを意味するが、その場合、類別詞の指定するカテゴリと「主名詞」の(素朴な意味での)一致の問題は、直接的には解決できないことになる。

- (12)a. 昨日中学生がポチを3回蹴飛ばした
- b. ? 昨日中学生がポチを3人蹴飛ばした

(12)a で確認できるように、日本語の類別詞には、「-回」のように、事象の生起回数を直接類別して示せるものがある。この「3回」のようなものが動詞句を修飾する典型的な(いわば真性の)副詞的数量詞であると考えことに大きな問題はないはずであるが、多回事象解釈の「3人」のようなものについても副詞的な遊離数量詞であると認定した場合、なぜその類別詞が名詞の類別を指定するものとなっているのか、ということについての十分な説明が必要となる。本節で検討してきたよう

*4 北原(1996)では、実体(個体)の数量から事象の生起回数への推論が検討されているが、事象生起回数が1回と推論された場合は同時量と見なされている。本稿では部分量解釈を分配的な解釈として扱っており、実際の事象の生起回数が1回であっても(それが部分量解釈として解釈されるかぎり)は分配的解釈となるため、(9)に関して実際の事象の生起回数は特に問題とならない。

に、副詞的な遊離数量詞は θ 実体量化の数量詞だとするのであれば、当該の θ 役割となる名詞の類別に合致した類別詞が現れることは当然のことであり、類別詞と遊離数量詞の記述する内容との対応について、特に問題なく説明できることになる。したがって、先行研究において副詞的とされる分配的解釈の遊離数量詞であっても、何らかの名詞的な要素を主名詞に持つ述部であるという可能性を含めて考察していくべきであると考えられる。

ただしこの場合さまざま、名詞句の遊離数量詞と副詞的な遊離数量詞の分布の違いが問題となる。名詞の遊離数量詞は副詞的な遊離数量詞と比して明らかに主名詞と local な関係を構成するが、副詞的な遊離数量詞はそうではない。また、(13)が示すように一般に副詞の分布は随意的にも見えるように広く、その点で(14)のような分布を示す遊離数量詞を副詞的なものと認定するということにも観察的な根拠があると考えられる。

- (13) a. ゆっくり 太郎は風呂につかった
- b. 太郎はゆっくり風呂につかった
- c. 太郎は風呂にゆっくりつかった
- (14) a. ? まだ明るいうちに、8人男の子が風呂に入った
- b. まだ明るいうちに、男の子が8人風呂に入った
- c. まだ明るいうちに、男の子が風呂に8人入った

次節から、この副詞的な遊離数量詞の文内での分布に関する観察を行い、名詞の類別を示す類別詞を持ちながら副詞的とされている遊離数量詞の適切な扱いを検討していく。

2. θ 実体量化の遊離数量詞の分布について

遊離数量詞は随意的な要素であり、特に主名詞と統語構造上の構成素関係等 local な関係が認められない副詞的な遊離数量詞については、副詞や二次述部として文内に生起している可能性が考えられる。また、別の重要な特徴として、副詞的な遊離数量詞については、属格名詞句や後置詞句を「主名詞」としている(あるいはそのように見える)場合が指摘されている。以下ではまず、副詞的な遊離数量詞の文内での分布について検討を行う。

2.1. 副詞的な遊離数量詞の分布について

本稿では名詞句の遊離数量詞の統語的な特性については論じる準備がないが、名詞句の遊離数量詞は名詞句との構成素関係(あるいはそれに近い local な関係)が認められるため、可能性としては名詞句内の要素、あるいは二次述部の中でもより local な関係を持つもの^{*5}として分析されることになると考えられる(Ishii 1999, 川添 1999, 川添 2002, Watanabe 2008 等参照)。一方副詞的な遊離数量詞は語順上の制約が緩く、文内の広い範囲に分布する。ここではまず、目的語を主名詞とする遊離数量詞の出現位置(表層の語順)について確認する。

- (15) a. ?? 30 分くらいの間に、7 本男の子がゴボウを掘り出した
 b. 30 分くらいの間に、男の子が7 本ゴボウを掘り出した
 c. 30 分くらいの間に、男の子がゴボウを7 本掘り出した
 (16) a. ?? 先月は、8 台新人さんがプリウスを売った
 b. 先月は、新人さんが8 台プリウスを売った
 c. 先月は、新人さんがプリウスを8 台売った

筆者の内省では、文頭に近い位置に遊離数量詞を置いた(15)(16)各 a の例に明確な問題が生じる。ただし以下のように、数量詞の前ではなく後ろにポーズを置くようにすると、許容度上の問題はほぼなくなる(ここでは読点によってポーズを示すことにする)^{*6}。

- (17) a. 30 分くらいの間に7 本、男の子がゴボウを掘り出した

*5 具体的には、以下の結果句のような場合が想定される。付帯状況句のような記述の二次述部と比べ、語順を変更しにくく、かつ二次叙述上の主語のすぐ後ろが基本語順と考えられる。

- (i) a. ?? 今日は真っ赤に、健太がハンカチを染めた
 b. ?? 今日は真っ赤に健太がハンカチを染めた
 c. ? 今日は健太が真っ赤にハンカチを染めた
 d. 今日は健太がハンカチを真っ赤に染めた

*6 ここでの問題は、高見(1998(下): 102-105)で検討されている遊離数量詞のかき混ぜと文頭の有標焦点位置との関わりに関係していると考えられるが、本稿では詳細を検討することができない。

- b. 先月は8台、新人さんがプリウスを売った

また、外項と内項がともにヒト名詞の場合、この種の遊離数量詞は文頭近くに置くことが難しくなる。

- (18) a. ? 30 分くらいの間に 5 人、店長が女の子を連れてきた
b. * 30 分くらいの間に、5 人店長が女の子を連れてきた

この点は目的語の実体(客体)の変化に関する場所を示す場所デ句(19)と類似した状況とも言えるが、客体変化の場所デ句については外項や内項の有生性に関わらず、常に文頭での許容度が低い。したがって(18)での許容度の低下は意味階層と表層語順との対応上の問題(客体変化のみに関わる修飾要素を文頭に配置しにくいこと)によるものではなく、遊離数量詞の主名詞がどの名詞句であるのかの特定に問題が生じるためだと考えられる。

- (19) 客体変化の場所デ句(「男の子」が「まな板の上」にいない解釈)
a. ?? 今度はまな板の上で、男の子がネギを刻んだ
b. * 今度はまな板の上で男の子がネギを刻んだ
c. 今度は男の子がまな板の上でネギを刻んだ
d. (?) 今度は男の子がネギをまな板の上で刻んだ

以上の特徴については、Ishii(1999)他でも検討されているように付帯状況を記述する状態記述(depictive)の二次述部との類似性が指摘できる。付帯状況のデ句は文内において比較的自由的な分布を示すが、二次叙述上の主語の候補が複数あると解釈される場合のみ許容度に問題が生じ、たとえば目的語の付帯状況の場合には、文頭側での許容度が低下する。

- (20) 目的語の付帯状況デ句 1

- a. タベも生で、いつもの常連さんがサンマを召し上がった
b. ? タベも生でいつもの常連さんがサンマを召し上がった
c. タベもいつもの常連さんが生でサンマを召し上がった
d. タベもいつもの常連さんがサンマを生で召し上がった

- (21) 目的語の付帯状況デ句 2(「友達」が「ほぼ裸」の解釈)

- a. ?? ほぼ裸で、男の子が友達を部屋から追い出した
- b. * ほぼ裸で男の子が友達を部屋から追い出した
- c. ? 男の子がほぼ裸で友達を部屋から追い出した
- d. 男の子が友達をほぼ裸で部屋から追い出した

こうした、基本的な分布は自由だが、項の有生性等によって許容度の低下が生じる場合があるという特徴は、主語を主名詞とする副詞的な遊離数量詞でも同様に観察できる。

- (22) a. 先月までに 3人、新入社員がフィナンシャルプランナーの資格を取得した
- b. 先月までに 3人新入社員がフィナンシャルプランナーの資格を取得した
- c. 先月までに新入社員が 3人フィナンシャルプランナーの資格を取得した
- d. 先月までに新入社員がフィナンシャルプランナーの資格を 3人取得した
- (23) a. 昨日は 3人、生徒が僕に親友を紹介し(てくれ)た
- b. 昨日は 3人生徒が僕に親友を紹介し(てくれ)た
- c. 昨日は生徒が 3人僕に親友を紹介し(てくれ)た
- d. * 昨日は生徒が僕に 3人親友を紹介し(てくれ)た
- e. ?? 昨日は生徒が僕に親友を 3人紹介し(てくれ)た

(22)で観察されるのは、目的語が数量詞の類別詞「-人」に合致しない無生名詞であった場合、主語を主名詞とする副詞的な遊離数量詞は比較的自由に文内に現れるということであり、(23)で観察されるのは、類別詞の指定する名詞類別に合致する名詞が複数ある場合には、出現位置との関係で許容度に大きな影響が現れるということである。付帯状況句についても、基本的な生起位置はかなり自由であり、かつ項の名詞句の有生性が許容度に強く関与することは観察上特に問題なく確認でき

る*7。

(24) 主語の付帯状況デ句 1

- a. 上半身裸で男の子がご飯を食べた
- b. 男の子が上半身裸でご飯を食べた
- c. 男の子がご飯を上半身裸で食べた

(25) 主語の付帯状況デ句 2

- a. 上半身裸で男の子が友達を部屋から追い出した
- b. 男の子が上半身裸で友達を部屋から追い出した
- c. ?? 男の子が友達を上半身裸で部屋から追い出した

ここでの観察は、副詞的とされる分配的解釈の遊離数量詞を副詞あるいは二次述部の要素とみなす先行研究での記述を越えるものではない。また、より重要となる、副詞か二次述部かという問題について、この 2.1 節での検討だけではまだ十分に論じることができないが、文内の分布は基本的にかなり自由であること、および文内の名詞句のタイプ(類別や有生性等)と出現位置とに関わる許容度上の問題が生じる場合があることの 2 点については確認できたということを指摘しておきたい。

2.2. 後置詞句中の名詞句を主名詞とする場合について

すでに(3)の例でも見たように、副詞的な遊離数量詞は、主名詞との構成素関係を出現の条件としていない。このことと連動して、後置詞句内の名詞句を主名詞とする場合、あるいは、属格(連体修飾格)の名詞句を主名詞とする場合があることも指摘されている。Ishii(1999: pp.238-248)では、高見(1998)および Kikuchi(1994)の

*7 付帯状況句については、非影響動詞の場合に目的語の付帯状況を記述することができないなど、動詞タイプとの関わりが知られている。また、デ句の場合とママ句の場合との異なりについては、Ishii(1999, fn.3 および fn.14)において、以下のような例とともに検討されているが、本稿筆者の内省では、ママ句に関しても local でない場合があり、詳細の検討は今後の課題としたい。

- (i) a. 太郎が泥酔状態で本を買った
- b. 太郎が本を泥酔状態で買った
- (ii) a. 太郎が泥酔状態のまま本を買った
- b. ?? 太郎が本を泥酔状態のまま買った

議論をもとに、後置詞句や属格句を主名詞としている遊離数量詞に認められる解釈が、分配的な VP quantifier としての解釈であることを示している。属格句が関わる場合については次節での検討することにして、この箇所では後置詞句^{*8} の場合を観察する。

- (26) a. 僕は元旦に教え子から 5 人年賀状をもらった
 b. 目標金額を達成するには、教官が寄付し、さらに学生から 20 名以上、
 お金を集めなければならない (高見 1998(上): p.94, (24))

(26) は高見 (1998) の例だが、「から」を主要部とする後置詞句内の名詞句を主名詞としているように見える。この例の改変したもの、および類例を追加する。(17) で見た現象と同様に、数量詞を焦点として解釈できる位置に置くと許容量が高まること、および特にポーズ等を置かない場合、主名詞を含むカラ格句の直後が最も許容量が高いことを確認されたい^{*9}。

- (27) a. 僕は 5 人、クラスメイトから年賀状をもらった
 b. ?? 僕は 5 人クラスメイトから年賀状をもらった
 c. 僕はクラスメイトから 5 人年賀状をもらった
 d. ? 僕はクラスメイトから年賀状を 5 人もらった
 (28) a. 涼子は 8 人、参加者から貴重品を預かった
 b. ?? 涼子は 8 人参加者から貴重品を預かった
 c. (?) 涼子は参加者から 8 人貴重品を預かった
 d. ? 涼子は参加者から貴重品を 8 人預かった
 (29) a. 健太は 3 人、クラスの女の子からテストの範囲を教わった

*8 「に」が後置する後置詞句については、「に」自体のカテゴリ(各マーカーか後置詞か)の問題が関係するため、後置詞句中の名詞句が主名詞となるか否かというここでの問題設定においては取り上げない。ただし、二格句を主名詞とする副詞的な遊離数量詞は可能である。このことは 3.1 節で確認する。

- (i) a. 昨日は 3 人、昔の教え子に会った
 b. 友達に 3 人立て続けに電話をもらった

*9 ただし、(27) (28) (29) 各 c のような例の許容量には一定の問題があるとする話者もある。こうした例の許容量の問題については、3 節で検討を行う。

- b. ?? 健太は3人クラスの女の子からテストの範囲を教わった
- c. 健太はクラスの女の子から3人テストの範囲を教わった
- d. ? 健太はクラスの女の子からテストの範囲を3人教わった

「もらう」「預かる」「教わる」のような3項の動詞ではなく、「届く」や「(電話が)ある」のような動詞の文でも、カラ格句内の名詞句を主名詞とする遊離数量詞は可能である。

- (30) a. ? 健太のところにクラスの女の子から3人プレゼントが届いた
- b. ? 健太に女の子から3人電話があった
- c. ? 次々と3人、部下から定時の連絡が入った

(27)～(29)、および(30)の各例における許容度の問題についてはさらに検討すべき余地があるが、分配的な解釈の遊離数量詞として判断するかぎり、カラ格句内の名詞句を主名詞として解釈することが可能である。ただし、後置詞句であればどのようなものでもかまわないわけではなく、(31)(32)の道具デ格句や(33)の原因デ格句のようなものについては、どのような語順であっても遊離数量詞が許容されない。

- (31) a. * 涼子は3本、新品の包丁でりんごをむいた
- b. * 涼子は3本新品の包丁でりんごをむいた
- c. * 涼子は新品の包丁で3本りんごをむいた
- d. * 涼子は新品の包丁でりんごを3本むいた
- (32) a. * 子どもたちが3本、犬をバットで叩いた
- b. * 子どもたちが3本犬をバットで叩いた
- c. * 子どもたちが犬を3本バットで叩いた
- d. * 子どもたちが犬をバットで3本叩いた
- (33) a. * 先月は2つ、台風で電車が停まった
- b. * 先月は2つ台風で電車が停まった
- c. * 先月は台風で2つ電車が停まった
- d. * 先月は台風で電車が2つ停まった

なお、これまで扱ってこなかったニ格句については、「に」自体のカテゴリ(格マーカーか後置詞か)の問題が関係するため、後置詞句中の名詞句が主名詞となるか否

かというここでの問題設定においては扱いにくい面がある。ただし、カテゴリーの問題を無視して観察を行えば、一部の二格句において、二格句(または二格句中の名詞句)を主名詞とする副詞的な遊離数量詞は可能である^{*10}。

- (34) a. なぜか昨日は3人、立て続けに昔の教え子に会った (動作の相手)
- b. 健太はクラスの女の子に3人チョコをもらった (起点的な相手)
- c. 涼子はクラスの女の子に8人チョコを渡した (着点的な相手)
- d. 健太はバケツに3つ水を汲んだ (着点的な物体)

2.1 節までで見てきた副詞的な遊離数量詞は、基本的に主語や目的語を主名詞とするものであった。ここで見た後置詞句の場合についても、必須度の低い原因や道具ではなく、より必須度の高い起点や着点、相手等の名詞句・後置詞句において、遊離数量詞が可能となることが確認できた。したがってこれまでの議論に関しては、ひとまず動詞の項を中心に、動詞の下位範疇化に関わるような要素のみが副詞的な遊離数量詞の主名詞となる、といった一般化を考えることができる。

だが、以下のような例では、主文の動詞が必須要素として要求しない属格句が遊離数量詞の主名詞となっているように見える。解釈としては、分配的な解釈のみが可能である。

- (35) a. 花子は[子どもたちの爪]を3人切った
- b. あの医者[は] [児童の眼]を30人調べた
- c. ジョンが[子どもたちの指]を10人折った (Kikuchi 1994: p.82, (9))

また、やはり Kikuchi(1994)が示しているイベント名詞の例でも、主文の動詞が認可する θ 役割と直接には関わらない属格句が分配的解釈の遊離数量詞の主名詞

*10 「方向」のように必須度の低い二格句の場合、副詞的な遊離数量詞が難しいようであるが、類別詞を共起させる関係で「方向」として解釈しやすい「～の方」等が用いられないことから許容度に問題のある例となりやすく、ここでは参考程度に示すに留める。

- (i) a. ? (みんな行くよー、と一声かけてから、) 健太は次々と友だちにボールを転がした
- b. ?? (みんな行くよー、と一声かけてから、) 健太は次々と友だちに6人ボールを転がした

となっている。

- (36) a. あの大学が[留学生の受け入れ]を 30 人断った
- b. ホンダが[アメリカでの車の生産]を 10 万台計画している
- c. 日立が[学生の採用]を 300 人中止した (Kikuchi 1994, p.83, (10))

属格句を主名詞とする場合の許容度については個人差もあるだろうが、分離不可能所有の関係にない(37)と比べると許容度が確実に高いことも事実である。こうした例を含めて、副詞的な遊離数量詞に対する統一的な一般化が可能かどうか、次節にて検討する。

- (37) a. * ジョンが[友達の手]を 3 人乗り回した
 - b. * ジョンが[学生の机]を 3 人買った
 - c. * ジョンが[子どもたちのおもちゃ]を 3 人壊した
- (Kikuchi 1994, p.82, (8))

3. θ 実体量化の遊離数量詞の統語的な特徴

分配的解釈の遊離数量詞に関する本稿これまでの記述を整理すると以下のようになる。

- (38) a. 副詞的な遊離数量詞とされる分配的解釈の遊離数量詞は、主名詞に認可される θ 役割に合致する実体を数え上げる「 θ 役割付き実体の量化」を表す数量詞であり、具体的な解釈としては部分量解釈や多回事象解釈が得られる。(=(9) a)
- b. 副詞的な遊離数量詞の文内における出現位置は付帯状況句の場合と類似しており、文頭から述語の直前まで基本的に自由に出現する。ただし、類別詞の類別と項となる名詞句の有生性や名詞類別によって主名詞の判別に影響が生じる場合には、特定の語順で許容度が低下する場合がある。
- c. 属格句を主名詞とする場合を除くと、副詞的な遊離数量詞は、外項・内項・起点句・着点句など、動詞を下位範疇化する必須度の高い θ 役割が認可される要素を主名詞とする。

本節では、以上の観察結果をもとに、分配的解釈の遊離数量詞の統語的特性についての提案を示す。

3.1. 可能なアプローチの検討

副詞的な遊離数量詞は、すでに見てきたように主名詞と local な関係を構成しない。また、後置詞句中や名詞句中の属格句として現れる主名詞は、後置詞句外あるいは属格句が収まる名詞句外の要素を c-統御しない。したがって、副詞的な遊離数量詞について統一的な扱いを考えるとすれば、この種の遊離数量詞に要求される構造的な要件を、主名詞による c-統御に求めることはできない。何らかの統語的操作を仮定し、主名詞が後置詞句外あるいは属格句が収まる名詞句外へ移動し、その後、遊離数量詞を c-統御するというような発想もあり得るだろうが、属格句の場合に所有者上昇を考えることは可能だとしても、後置詞句内から名詞句のみを抜き出すような操作を考えることは難しいだろうと思われる。

反対に、遊離数量詞が最終的に数量詞上昇を適用され、構造上高い位置から主名詞を c-統御する、という想定を考えることについては、一定の可能性があるようにも思われる。ただしその場合、主名詞の選択に関して、起点の後置詞句と道具の後置詞句を区別できるような何らかの機構、あるいは条件を考えなければならないはずである。また合わせて、名詞句の遊離数量詞にはそうした数量詞上昇が適用されない理由も考えなければならない。名詞句の遊離数量詞の出現位置は、すでに多くの先行研究が指摘しているように非常に限定されているからである。

こうしたことから、副詞的な遊離数量詞の分布についての記述には、名詞句の遊離数量詞と比べて比較的自由的な語順を示すこと、および主名詞に認可される θ 役割の必須度に連動することの両方に対する説明を含む必要があることになる。本稿ではこのことに対して、副詞的な遊離数量詞を、内部に空範疇の主名詞を含む副詞節中の述部であるとする分析と、その空範疇が主題コントロール(thematic control, Jaeggli 1986)を適用される PRO であるとする分析の組み合わせによって解決する。

まずナガラ節やツツ節など、音形を持った主語が現れない A 類節(南 1974)の文内における出現位置を確認する。

- (39) a. [PRO 泣きながら] 健太が晩ご飯を食べた
- b. 健太が[PRO 泣きながら]晩ご飯を食べた
- c. 健太が晩ご飯を[PRO 泣きながら]食べた

- (40) a. [PRO 何度も首をかしげつつ]涼子が本を読んでいる
b. 涼子が[PRO 何度も首をかしげつつ]本を読んでいる
c. ? 涼子が本を[PRO 何度も首をかしげつつ]読んでいる

ナガラ節やツツ節の出現が比較的自由的なことの詳細な記述は割愛するが^{*11}、ここで重要なのは、単純な副詞句だけでなく、内部に PRO のような空範疇が存在すると考えられる副詞節もその出現位置が比較的自由であるということである((13)を参照)。このことは、仮に副詞的な遊離数量詞が以下のような構造であるとしても、その空範疇が(39)(40)と同様の PRO だと考えられる場合には、語順の記述に関する問題は特に生じないということである。

(41) 仮説(暫定版): θ 実体量化の遊離数量詞の構造

[副詞節 e 遊離数量詞]

副詞的とされる遊離数量詞については、直接主名詞との叙述関係を構成するのではなく、空範疇を主名詞とする述部として捉える、というのがこの分析の基本的な発想である。名詞句の遊離数量詞の統語上の特性に関する Miyagawa (1989)や Ishii (1999)、川添(1999、2002)の記述は特に、名詞句の数量詞に対する(二次)述部分析を妨げるものではないと本稿では考えるが、副詞的な遊離数量詞についても、(41)により数量詞自体は述部であるという分析が成立するのであれば、遊離数量詞は名詞句の遊離数量詞、副詞的な遊離数量詞ともに述部である、という統一的な記述が与えられることになる。その上、副詞的な遊離数量詞の副詞らしさは、副詞節としての特徴と結びつけて説明できる。こうしたことから、まずは(41)を本稿の提案の原型としたい。

さてその上で、(41)の"e"の正体についてであるが、現象としてはこの空範疇はこれまで本稿が主名詞と言ってきたものと同一指示となる必要があるが、しかし主名詞による c-統御は考えられないという点は、すでに見てきた通りである。

- (42) a. 30 分くらいの間に [ei 7 本]、男の子がゴボウ i を掘り出した

*11 特に A 類節のコントロールが、Jaeggli (1986) の言う項コントロール(argument control)と主題コントロールのどちらに該当するのか、あるいはどちらにも該当しないのかといった問題の検討は重要であるが、今後の課題となる。

- b. 涼子は [ei 8人]、[PP 参加者 i から] 貴重品を預かった

PRO は文内の要素によるコントロールを受けない場合には随意的な (arbitrary) 解釈となることが知られているが、分配的解釈の遊離数量詞にそうした解釈の関与は認められない。

- (43) a. [PRO_{arb} 泳ぐことは] (誰にとっても) 健康によい。

- b. [PRO_{arb} タバコをすうことは] よくない

(長谷川 1995: p.29 (4c), p.31 (15a) を一部改めたもの)

ここで本稿では、受動文における潜在項による PRO のコントロールに対する Jaeggli (1986) の分析を本稿の現象に適用したい。Jaeggli (1986) では受動文の目的節中の PRO に関して、それをコントロールする要素が現れない、または PRO を c-統御しない場合について、主題コントロールによるものとする分析が提案されている。

- (44) a. The price was decreased (by the government) [PRO to help the poor].

- b. The gifts were brought [PRO to impress the Indians].

(Jaeggli 1986: pp.611-618, (52b) (65) (70a))

確認すると、(44) の [] 内の PRO は、解釈上は "decrease" や "bring" の降格された外項によってコントロールされているが、外項自体は潜在項となるか、音形を持って現れても by 句の内部に現れており、文内に PRO を c-統御するコントローラはない。こうした場合に成立する、通常のコントロールとは異なるコントロールを、Jaeggli (1986) では主題コントロールと呼んでいる。

当然のことながら、英語の受動文や潜在項における上記の現象と、本稿の、遊離数量詞を述部とする副詞節の現象とがそのまま対応させられるものであるかについては十分な検討が必要であり、また Jaeggli (1986) の議論は受動文の潜在項や降格された by 句中の要素によるコントロールを扱うものであるため、PRO のコントローラは基本的に外項の θ 役割となることも、ここで確認しておかなければならない。だが、本稿ではひとまず PRO に関して、項の c-統御によって規定されたコントロールを受けるものと随意的な解釈となるものの他に、文内の要素ではなく、述語の θ 役割のリストにコントローラを求めるタイプが存在するということを重視したい。

この主題コントロールを前提として、本稿の仮説(41)を改訂する。主題コントロールを受ける PRO については、以下便宜的に"PRO_θ"と示すことにする。

(45) 仮説(改訂版) : θ 実体量化の遊離数量詞の構造

[副詞節 PRO_θ 遊離数量詞]

この(45)によれば、本稿が θ 実体量化の遊離数量詞と呼んでいる、分配的解釈の遊離数量詞の「主名詞」は、厳密には音形を持った名詞句ではなく、PRO_θ となる。またこの PRO_θ のコントロールに関しては、動詞を下位範疇化するような必須度の高い θ 役割のリストが参照される。つまり、動詞から予測されやすい θ 役割が、PRO_θ のコントローラの候補となりやすく、反対に動詞の意味によっては予測しにくい θ 役割をコントローラとする場合には、文の許容度に問題が生じる。さらに、おそらくは数量詞の類別詞が指定する類別と θ 役割の整合性も、解釈の際に利用されるものとする。つまり、PRO_θ の照応先は主題コントロールを前提として、主節述語の θ 役割と、自らの述部である数量詞中の類別詞とによって特定されると考えるのである^{*12}。

(46)a. 30 分くらいの間に [副詞節 PRO_{θi} 7 本]、男の子がゴボウ_iを掘り出した

b. 涼子は [副詞節 PRO_{θi} 8 人]、[PP 参加者_iから]貴重品を預かった

(38)b にまとめた副詞的な遊離数量詞の分布に関して(46)で確認すると、PRO_θ は文中に顕在している他の要素との c-統御関係から基本的に自由であるため、この副詞節には PRO_θ に由来する語順上の制約は存在せず、文頭に近い焦点位置にも現れる。(46)では遊離数量詞の構造上の主名詞である PRO_θ と解釈上の主名詞とに "i" が付されているが、これは両者が直接関係して成立する同一指示指標ではなく、主題コントロールを仲立ちとするものである。したがって、副詞的な遊離数量詞が比較的自由的な分布を示すことと(45)とは、問題なく対応している。また、類別詞が

*12 ここで主題コントロールと呼んでいるものは、類別詞の類別を前提に、動詞の概念構造や意味構造から予測されやすい候補を主名詞に選ぶという点で、概念構造や意味構造によってコントローラが決定されていると考えることも可能であるように思われる。詳細は今後の課題となる。

指定する名詞類別に合致する要素が複数存在した場合には、焦点位置を除けば主名詞の直後に現れた方が許容されやすいという(47)のような現象については、なぜその方が許容されやすいのかという問いへの答えは(45)から直接導き出すことはできないが、 θ 役割をコントローラとする $PRO_{\theta i}$ と、その θ 役割が認可される名詞句等とは最終的には同じ指示対象を持つことになるため、それらを近接して配置する、あるいは両者の間に他の要素が存在しない語順とすることで解釈が容易になるのは自然なことである(焦点位置の場合を除くと、近接していない場合の方が解釈が容易になる、といったことは考えにくい)。

- (47) a. 昨日は[$PRO_{\theta i}$ 3人]、生徒 i が僕に親友を紹介し(てくれ)た (= (23))
 b. 昨日は、[$PRO_{\theta i}$ 3人]生徒 i が僕に親友を紹介し(てくれ)た
 c. 昨日は、生徒 i が[$PRO_{\theta i}$ 3人]僕に親友を紹介し(てくれ)た
 d. * 昨日は、生徒 i が僕に[$PRO_{\theta i}$ 3人]親友を紹介し(てくれ)た
 e. ?? 昨日は、生徒 i が僕に親友を[$PRO_{\theta i}$ 3人]紹介し(てくれ)た

この分析において副詞節は、主節の事象において当該の θ 役割が認可される実体の数量を記述する役割を果たしており、本稿 1 節で整理した、分配的解釈とは θ 役割に該当する実体を数え上げる θ 実体量化の解釈であるということ(=(38) a)と、全く問題なく対応している。つまり θ 実体量化の遊離数量詞が示しているのは、音形を持った名詞が指示する実体の数量ではなく、主節動詞の θ 役割に合致する実体の数であり、行為者が何人、対象が何個/何本、といった数え上げ方をするものである。

たとえば行為者と解釈される複数の実体の実世界に存在する場合でも、名詞句の遊離数量詞が表す単純実体量化では名詞の指示対象の数量を示すだけとなり、量化と θ 役割との関わりは間接的である。したがって、量化がなされた複数実体全体が一つの行為者として扱われるような解釈となり得る。しかし、 θ 実体量化の場合には単なる実体でなく行為者の数量を示すことになるから、必然的に全体で一つの行為者と扱われるグループ読みのような解釈とはならない。これが、本稿が考える分配的解釈の生じる機構である。

次の箇所では、本稿最後の課題として、属格句を主名詞とするように見える分配的解釈の遊離数量詞について検討する。

3.2. 属格句の遊離数量詞について

分配的解釈の遊離数量詞に(45)を仮定する本稿のアプローチにとって重大な問題となるのは、当該の数量詞の解釈上の主名詞が属格句となっているように見える場合である。

(48) a. 花子は[子どもたちの爪]を[PRO_θ 3 人]切った

b. あの医者は[児童の眼]を[PRO_θ 30 人]調べた

c. ジョンが[子どもたちの指]を[PRO_θ 10 人]折った

(Kikuchi 1994: p.82, (9)を一部改変)

(49) a. あの大学が[留学生の受け入れ]を[PRO_θ 30 人]断った

b. ホンダが[アメリカでの車の生産]を[PRO_θ 10 万台]計画している

c. 日立が[学生の採用]を[PRO_θ 300 人]中止した

(Kikuchi 1994, p.83, (10)を一部改変)

本稿のアプローチでは、副詞的な遊離数量詞の主語 PRO_θ は、主節動詞の θ 役割が認可される要素((48) (49)では対格句全体)と指示上合致する必要がある。PRO_θ のコントローラは θ 役割であり、この θ 役割は数量詞の解釈上の主名詞に認可されるものであるからである。たとえば(48)においては「切る」「調べる」「折る」が内項に認可する θ 役割が PRO_θ を主題コントロールするため、解釈上の主名詞はそれぞれ「子どもたちの爪」「児童の眼」「子どもたちの指」となる。つまり本稿のアプローチでは、PRO_θ の最終的な照応先は、コントローラとなる θ 役割が認可される名詞句の指示対象と合致しなければならない。しかし、(48) (49)において遊離数量詞の類別詞は解釈上の主名詞ではなくその内部の属格句を指定している(ように見える)ため、量化の対象が(48) (49)の[]全体でなく下線部のみであるとなった場合には、少なくともこの種の遊離数量詞には本稿のアプローチは適用できないことになる。

本稿ではこの問題が本稿のアプローチにとって決定的な問題とはならないことを、2つの点から述べておきたい。

まず、分離不可能所有関係の場合もイベント名詞の場合も、適切な類別詞として名詞句内の名詞と合致するものが選択される場合があることを確認する。

(50) a. 今日は 240 人、[小学生の眼]を診察しなければならない

b. ?? 今日は 480 個、[小学生の眼]を診察しなければならない

- (51) a. 半日かけて 40 頭、[馬のひづめ]を検査した
- b. ? 半日かけて 160、[馬のひづめ]を検査した
- (52) a. 今年は[ティーチングアシスタントの割り当て]が 4 人減ってしまった
- b. 今年は[ティーチングアシスタントの割り当て]が{* 4 件/? 4 件}減ってしまった
- (53) a. [友達の採用]が 3 人決まった (Kikuchi 1994: p.84, (13c)を一部改変)
- b. [友達の採用]が{* 3 件/* 3 件}決まった

(50) (51)は、Kikuchi(1994)の言う IP nominals(分離不可能所有名詞)に該当する場合だが、そもそも対格句全体に合致するような類別詞が想定しにくい。筆者の内省では類別詞を欠く(51)b のようなものであれば許容度はやや改善するが、いずれにしても一つの観測的な事実として、[名詞句 分離不可能所有者-属格 分離不可能所有物]というような構造の名詞句に対応する類別詞を考えた場合、その属格句の名詞類別に合致する類別詞を選ばざるを得ないという状況があると考えられる。

このことは、(52) (53)でも同様に観測される。(52)の「割り当て」で言えば、「割り当て」自体に直接対応するような類別詞はなく、それが「割り当て人数」の意味であれば「-人」が、「割り当て金額」の意味であれば「-円」が対応する、というような状況にあると考えられる。

もちろんこの観測は、(50)～(53)各 a の遊離数量詞の主名詞が[]を付した全体になるということまでは意味しない。Kikuchi(1994)が述べる外的認可(external licensing)のように、[]内の下線部を直接主名詞としている可能性も当然残っている。ただし、佐藤(2002)が明確にした、イベント名詞句が「実現が未確定なイベント」であるか「実現が確定されたイベント」であるかという違いによって遊離数量詞の外的認可に違いが見られるという事実は、この問題に関する一つの観点を提示してくれる。

- (54) a. 日立が[学生の採用]を 300 人中止した
- b. あの大学が[教授の本の購入]を 1000 冊禁止した
(佐藤 2002: p.114, (4)を一部改変)
- (55) a. * あの大学が[留学生の受け入れ]を 30 人伝えた
- b. * 日立が[学生の採用]を 300 人報告した (佐藤 ibid., (5))を一部改変)

佐藤(2002)では、(54)の[]で囲んだ部分が「実現が未確定なイベント」、(55)

のそれが「実現が確定されたイベント」であるとされ、合わせてこの問題が「定」「不定」の問題と関わる可能性も指摘されている(佐藤 2002: p.126 および fn.14)。本稿が検討してきた遊離数量詞は、(56)が示すように主名詞が定の名詞であることを許さない。しかし特定性に関しては(57)が示すように特定の実体を指示していても、また(58)のように不特定の実体を指示していても問題はない。

- (56) a. * 僕は健太と涼子と早紀から 2 人年賀状をもらった
- b. * 次々と 2 人、健太と涼子と早紀がこのゲームをクリアした
- (57) a. 1 週間で 5 人、仲のいいクラスメイトが入院中の健太の様子を見舞いに来た
- b. 昨日健太はいつも使っている会社の車を 4 台洗車した
- (58) a. 今日中に 4 人お客さんが来ればノルマ達成だ
- b. 先に 10 匹フナを釣った人が勝ちだ

(54) (55) の下線部の名詞句はいずれも不定名詞であり、名詞の指示上の異なりは特定性のみと考えられる。(54) の下線部は不特定の名詞であり、具体的な指示対象が特定されることはないが、(55) の下線部は「受け入れが決まった留学生」「採用が決まった学生」を指示しており、たとえば調べれば名前も分かるような特定の存在であると考えることができる。しかし(57) (58) で確認したように、特定性が、本稿が見てきたような遊離数量詞の許容度に影響すると考えるための根拠は現状においてない。となると、(49) (54) のような例の下線部のみを主名詞と考えることによって、(54) (55) の許容度の差は説明できないことになる。

一方、佐藤(2002)がその可能性を指摘しているように、(54) の対格句は不定の、(55) の対格句は定の指示であるとする、(54) (55) の許容度の差異は、「3 人」「5 冊」のような数詞+類別詞の形式の遊離数量詞の主名詞は不定名詞でなければならないという、これまで検討してきた遊離数量詞一般の特性に由来する現象として説明ができることになる。つまり、遊離数量詞の主名詞に求められる不定性は、(54) (55) で[]に囲まれた全体に求められており、下線部のみに求められているわけではないのである。

以上の分離不可能所有名詞やイベント名詞における類別詞の問題、そしてイベント名詞の定性に関する問題は、属格句を主名詞と考えるべきではないことを意味している。つまり、属格句を主名詞としているように見える遊離数量詞であっても外的認可を考える必要はなく、その他の分配的解釈の遊離数量詞と同じように(45)が

適用される、 θ 実体量化の副詞的な遊離数量詞だと考える必要があるということになる。

4. まとめ

本稿では、副詞的とされる遊離数量詞について取り上げ、それが θ 実体量化と本稿が呼ぶ量化を表す数量詞であること、その出現は付帯状況句のような二次述部と類似しており、かつ動詞を下位範疇化するような(外項、内項、起点等の)必須度の高い θ 役割の名詞句を解釈上の主名詞とし、道具や原因のように要素は主名詞としないことを確認した。この意味・解釈上の特徴と、文内の分布や出現に関する観察結果を説明するために、副詞的とされる遊離数量詞は、主題コントロールを受ける PRO_{θ} を主語とする副詞節中の述部であるとする分析を提案した。このアプローチのもとでは、副詞的とされる遊離数量詞も、名詞句の遊離数量詞と同様に数量詞自体は述部の性質を持ったものとして見なされ、文内の分布等で現れる副詞的な振る舞いについては節としての振る舞いだとして扱われることになる。

今後の課題としては、大まかに述べて、名詞句の遊離数量詞の構造をさらに検討し、厳密な比較を行うこと、文内の分布で類似した特徴を示す付帯状況句のような二次述部の構造の検討と PRO のコントロールに関する議論を深めることで、本稿のアプローチの妥当性や発展性を検証することの二点となる。

参考文献

- 石田 尊(2012a)「外項の遊離数量詞について一眼前描写的な同時把握量一」『文藝言語研究言語篇』62, pp.21-36. 筑波大学大学院人文社会科学研究科文芸・言語専攻.
- 石田 尊(2012b)「遊離数量詞の統語的な特性について一副詞的とされる遊離数量詞の場合を中心に一」第9回現代日本語文法研究会口頭発表. 2012年11月17日, 於大東文化大学.
- 井上和子(1978)『日本語の文法規則』大修館書店.
- 川添 愛(1999)「日本語遊離数量詞と量化一後置存在量化詞と副詞的量化詞一」『九

- 大言語学研究室報告』20, pp.1-28. 九州大学文学部言語学研究室.
- 川添 愛(2002)「**「と」**による等位接続と遊離数量詞」『言語研究』122, pp.163-180.
- 北原博雄(1996)「連用用法における個体数量詞と内容数量詞」『国語学』186, 76-63.
- 北原博雄(1997)「連用用法の数量詞が表す数量について一非対格性の仮説からの検討一」『月刊言語』26-3, 98-103. 大修館書店.
- 佐藤香織(2002)「イベント名詞句補部からの数量詞遊離現象」『日本語文法』2-2, pp.112-127.
- 高見健一(1998)「日本語の数量詞遊離について一機能論的分析」『月刊言語』(上) 27-1, pp.86095. (中)27-2, pp.86-95. (下)27-3, pp.98-107. 大修館書店.
- 竹沢幸一(2001)「日本語の状態記述二次述部と品詞分類一記述的考察を中心に一」筑波大学「東西言語文化の類型論」特別プロジェクト研究 研究報告 IV, pp.237-264.
- 長谷川信子(1995)「省略された代名詞の解釈」『日本語学』14-4, pp.27-34.
- 長谷川信子(1999)『生成日本語学入門』大修館書店.
- 南不二男(1974)『現代日本語の構造』大修館書店.
- 三原健一(1989)「**「X 特定性」**の概念と不定名詞句」『言語研究』96, pp.43-60.
- 三原健一(1998)「数量詞連結構文と**「結果」**の含意」『月刊言語』(上)27-6, pp.86-95. (中)27-7, pp.94-102. (下)27-8, pp.104-113. 大修館書店.
- 李 昇祐(2010)「日本語の数量詞と2次述部」『言語学論叢』オンライン版 3, pp.45-56, 筑波大学一般・応用言語学研究室.
- Culicover, Peter W. and Ray Jackendoff (2001). "Control Is Not Movement", *Linguistic Inquiry* 32-3, pp.493-511.
- Ishii, Yasuo (1999) "A Note on Floating Quantifiers in Japanese", In *Linguistics: In Search of the Human Mind -- A Festschrift for Kazuko Inoue*, Masatake Muraki and Enoch Iwamoto (eds.), pp.236-267. Tokyo: Kaitakusha.
- Jaeggli, Osvaldo A. (1986) "Passive", *Linguistic Inquiry* 17-4, pp.587-622.
- Kikuchi, Akira (1994) "Extraction from NP in Japanese", In *Current Topics in English and Japanese*, Masaru Nakamura (ed.), pp.79-104. Tokyo: Hituzi Syobo.
- Koizumi, Masatoshi (1994) "Secondary Predicates", *Journal of East Asian Linguistics* 3-1, pp.25-79.
- Koizumi, Masatoshi (2000) "String Vacuous Overt Verb Raising", *Journal of East Asian Linguistics* 9-3, pp.227-285.
- Ladusaw, William A. and David R. Dowty (1988) "Toward a Nongrammatical Account

- of Thematic Roles", *Syntax and Semantics* 21, pp.61-73. New York: Academic Press.
- Miyagawa, Shigeru (1989) *Structure and Case Marking in Japanese*, *Syntax and Semantics* 22. New York: Academic Press.
- Nakanishi, Kimiko (2008) "The Syntax and Semantics of Floating Numeral Quantifiers", In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.), pp.287-319. New York: Oxford University Press.
- Nishigauchi, Taisuke (1984) "Control and the Thematic Domain", *Language* 60-2, pp.215-250.
- Sadakane, Kumi and Koizumi Masatoshi (1995) "On the Nature of the "Dative" Particle ni in Japanese", *Linguistics* 33-1, pp.5-33.
- Terada, Michiko (1990) Incorporation and argument structure in Japanese. Doctoral dissertation, University of Massachusetts.
- Watanabe, Akira (2006) "Functional Projections of Nominals in Japanese: Syntax of Classifiers", *Natural Language & Linguistic Theory* 24-1, pp.241-306.
- Watanabe, Akira (2008) "The Structure of DP", In *The Oxford Handbook of Japanese Linguistics*, Shigeru Miyagawa and Mamoru Saito (eds.), pp.513-540. New York: Oxford University Press.

いしだ たける／人文社会系
(2012年11月22日受理)